

## 学融合推進センター 運営委員・協力教員のご紹介

今号から学融合推進センターの運営に携わっている教員の方々よりいただいたメッセージをご紹介します。

### 1. センター運営委員 中村 康夫 教授 (文化科学研究科)

本学の総合研究大学院大学という名称からはイメージできないが、この大学は圧倒的に理系枠の大きい大学である。日本の学術の世界は研究費の多寡によって価値意識が成り立っているという側面があるから、理系の強い大学であることは意味があるかもしれない。そして、実学を尊重するその金銭感覚は政治世界にも共通している。

これが、学術の世界を正しく評価して政治的評価がそうなのであれば健全であるとも言える。しかし、金銭中心に計るというこの政治的価値観の下に大学の可能性を置くことは学術の自立性を阻害し、学問的には将来性をかなり失うことになる。

私の意識の中では哲学は物理学と人文学に通底の世界であり、その意味において文理融合は学術本来の意味からは極めて自然な世界である。私は、センターの運営委員として、分散的に専門化を推進した学術の世界全体を、幾分総合化することで、今日的修正を行いたいと思っている。

### 2. センター協力教員 佐々木 顕 教授 (先導科学研究科)

エイズウイルスや睡眠病の病原体トリパノソーマ、インフルエンザウイルス等の病原体は、表面抗原を次々と「脱ぎ変える」という巧妙な戦略によって、免疫系の攻撃から逃れます。このような病原体の流行と進化を予測するために、ウイルスの表面抗原と免疫応答の共進化に関する数理モデルを提案し、その数理的解析やシミュレーションを通じて病原体の進化のさまざまな謎を解き明かす研究を行っています。このほか、性の進化、病原体と宿主の軍拡競争、協力行動の進化、空間ネットワークと病原体の毒性の進化、同所的種分化とニッチ分割、制限酵素認識配列の進化等などのテーマを数理モデルをもとに研究しています。

総研大の特徴はその研究対象の多彩さにあります。私の研究トピックの多くも総研大の他の機関で行われている研究に密接に関わっています。学融合研究センターでは、総研大の研究者間ネットワークのトラフィックをますます密にするとともに、新しい研究交流のハブを作ることに努力していきたいと考えています。

## 学融合研究事業

### 1. 戦略型研究プロジェクトの採択結果

前号でお知らせしました通り、本学の特性を活かした学際的な新研究領域の創成を目的として、戦略型研究プロジェクトのテーマ及び参画ユニットの公募が行われ、6月30日の締め切りまでに14件の応募がありました。7月に行われた書類審査において3件が候補として選ばれ、8月に行われたヒアリングにて最終的に2件が採択となりました。

〈締め切り時点での申請状況〉

研究科	文化	物理	高エネ	複合	生命	先導
申請件数	3件	0件	5件	1件	4件	1件

採択となった研究プロジェクトは以下の2件です。これらのプロジェクトは本年度を準備期間とし、来年度より本格的に始動する予定です。ここでは各プロジェクトの概要を簡単に紹介しますが、さらに詳しい内容につきましては学融合推進センターのホームページをご覧ください。

研究プロジェクト一覧 <http://center.soken.ac.jp/project/index.html>

A) 「現生人類の拡散による遺伝子と文化の多様性創出に関する総合的研究」

生命科学研究所 遺伝学専攻 齋藤成也 教授 (平成22年度予算 500万円)

「現生人類は、およそ20万年ほど前にアフリカから拡散を始めた。その後ユーラシア大陸に進出し、ヨーロッパとアジア、さらにスンダランドを南下してサフルランドへ、北上してベーリンジアからアメリカ大陸へと拡散していった。数千年ほど前になるとオセアニアからマダガスカルまでの広い範囲に拡散していった。このあいだに生業様式は採集狩猟に農耕牧畜が加わり、人口が急速に増加していった。現在では、これらの多様化は、遺伝子と文化の混淆により失われつつある。

本研究では、人間社会における「多様性」をキーワードとして、主として遺伝子と文化の面から、現生人類の多様性が地球上への拡散につれてどのようなパターンで増加していったのかを明らかにすることを第一の目的とする。第二の目的は、長いあいだに培われたこの多様性が近年急速に失われているパターンを、集団間の遺伝子レベルでの混血率と文化レベルでの混淆率を推定するなどの方法によって比較することである。」

B) 「生命科学の発展がもたらす社会的課題とその対応策の基盤構築」

先導科学研究科 生命共生体進化学専攻 長谷川真理子 教授

(平成22年度予算 100万円)

「生命科学が急速に発展し、人体を本格的に研究対象として操作する事態が到来している。この発展は急速であるため、人体や生命をめぐる従来の価値観、社会の常識との間にずれが生じ、研究者と一般社会との間での調整が必要になってきている。これに対応するためには、社会的理解や調整が必要な課題について、研究の現状と問題点を正確でバランスのとれた視点から社会に提供するとともに、研究者が生命科学研究を進めていく上で、信頼して依拠することのできる研究規制の基本方針と、具体的な対応策とを提供する必要がある。

本研究では、そのための知的基盤を構築することを目的に、国内、海外の生命倫理に関わる諸制度、諸規制、およびそれらが形成されてきた過程に関して包括的な情報収集を行い、これらを研究者にとって有用な形に分析、編集して広く提供するオープンソースの構築を行なう。」

2. その他の公募型研究の採択結果

公募型共同研究・若手研究者研究支援・女性研究者研究支援については前回号にて採択状況を掲載しましたが、最終的な採択結果が出ましたのでご報告いたします。

A) 公募型共同研究

(採択研究申請総額 48,356千円 予算配分総額 40,600千円 査定率 84%)

	文化	物理	高エネ	複合	生命	先導	他	計
申請	4	1	3	2	2	5	0	17
採択	1	0	3	1	1	4	0	10
率	25%	0%	100%	50%	50%	80%	—	59%

## B) 若手研究者研究支援事業

(採択研究申請総額 19,094 千円 予算配分総額 14,700 千円 査定率 77%)

	文化	物理	高エネ	複合	生命	先導	他	計
申請	0	5	4	1	10	2	6	28
採択	0	1	1	1	5	2*	4	14
率	—	20%	25%	100%	50%	100%	67%	50%

\* 先導科学研究科の1件については採択通知後に申請者から辞退の申し出があった。

## C) 女性研究者支援事業

(採択研究申請総額 9,574 千円 予算配分総額 7,700 千円 査定率 80%)

	文化	物理	高エネ	複合	生命	先導	他	計
申請	0	1	1	1	5	1	3	12
採択	0	1*	1	1	2	0	2	7
率	—	100%	100%	100%	40%	0%	67%	58%

\* 物理科学研究科の1件については採択通知後に申請者から辞退の申し出があった。

## 学術交流事業 第1回 実践的大学院教育研究会 開催

(文責 学融合推進センター 講師 岩瀬峰代)

学融合推進センターでは、総研大生にふさわしい総合教育を提供するための大学院教育プログラムの立案、実施に取り組み始めている。

「組織で支援する学び～高等教育における教育改革～」をテーマに9月3日(金)葉山キャンパスにおいて研究会が開催された。この研究会では「教育改革のための組織と制度」柳澤康信(愛媛大学長)、「ドイツの事例と研究者コンピテンシー」津田純子(新潟大学大学教育機能開発センター教授)、「全学交流事業を事例にした大学院生の学び」奥本素子(学融合推進センター助教)の三つの講演が行われ、その後、参加者を巻き込んだパネルディスカッションが行われた。

参加した教員からは「大学教員には教育に関する素養が求められるという視点は目から鱗が落ちる思いだった。」あるいは「本学の研究室のシステムが、キャリア形成という点で不利であり、全学教育で対応する必要があるのでは。」といった感想が聞かれた。

## 学融合推進センター 事業予定表

学融合推進センターでは10月から1月にかけて下記の事業を行います。各事業の詳細につきましては本学のホームページにてご確認ください。

総合研究大学院大学 HP: <http://www.soken.ac.jp/event/index.html>

10月7・8日	後学期 学生セミナー
10月8～11日	日本文化を学ぶコース・日本語講座
10月23・24日	第4回 総研大ワークショップ
12月2～4日	総研大レクチャー「学術映像の基礎-みる・つくる」
12月16～18日	総研大国際シンポジウム「New Frontiers in Brain Science」
12月18日	総研大国際シンポジウム・ポストイベント「神経科学神話を超えて」
1月20・21日(暫定)	学融合研究事業 公開研究報告会

## 編集委員会より

学融合推進センターの発足から約半年が経ち、多くの事業が行われております。今後も様々な事業についてご報告して参りますが、ホームページの方もご覧いただき最新の情報をご確認ください。次号のニューズレターは1月頃発行の予定です。(文責:見上)

学融合推進センター HP: <http://center.soken.ac.jp/index.html>